

令和7年度一関市観光審議会 会議録

- 1 会議名 令和7年度一関市観光審議会
- 2 開催日時 令和7年7月2日（水）午後1時30分から午後3時5分まで
- 3 開催場所 一関市役所 3階 特別会議室
- 4 出席者
 - (1) 委員 伊藤利幸委員、坂田真樹子委員、佐々木賢治委員、柴田博之委員、千葉セツ子委員、船山賢治委員、松本数馬委員
※欠席者 遠藤史佳委員、丹野麻琴委員、千葉敏則委員
 - (2) 事務局 石川隆明副市長、小野寺正寿商工労働部長、渡辺恭弘観光物産課長、佐々木浩二観光物産課長補佐兼物産係長、鈴木敏宏観光物産課長補佐兼観光係長

5 議 事

一関市観光振興計画の推進について

- 6 公開、非公開の別 公開
- 7 傍聴者の数 1人（報道機関）
- 8 挨拶

石川隆明副市長

本来であれば市長が参りまして皆様方にご挨拶を申し上げるところですが、公務が重なっており私から一言ご挨拶を申し上げます。

皆様方にはお忙しい中、本日はご参加いただきましてありがとうございます。

また、日頃よりそれぞれの団体から当地方の観光振興にご理解とご協力をいただいておりますことに対しまして、この場をお借りして御礼を申し上げます。

当市の観光における直近の状況については、これから説明いたしますが、入込客数などを見ますとコロナ禍前に順調に回復していると思われまます。特にインバウンド需要は顕著であります。

当地方の観光を捉えると、今から30年くらい前から言われていたことは、潜在的な課題として周遊型から滞在型にできないかという話題が一時期大きな課題として捉えられていたものであります。

これは解決に至っておりませんが、観光客は入ってきているという実態があります。様々な宿泊施設の定数などを見ますと、全てを足すと3,000くらいにはなります。実態とすれば、そこまでは及びません。

このような数がありつつ、一方では最近の国内の観光客の需要、インバウンドの需要を見ると、ここ10年くらいで変わっている状況であります。その変化をしっかりと捉えて観光振興を図っていかなければなりません。

当市の観光施策については、観光振興計画で進めてまいりましたが、令和4年に策定した計画が令和8年度までの計画期間として進めているわけですが、令和4年はコロナ禍のやや終わりに近づきつつありますが、コロナの影響を強く受けていた時期に策定した計画でありますので、次期計画を策定するためにも今後の在り方を皆さま方から様々なご意見をいただきたいと思っております。

いずれ、観光は当市にとってみれば外貨流入という面もありますし、アイデアを出せば地域内の経済循環、6次産業化も含めて考えれば、そのような観点からでも地域振興に直接結びつく部分がありますから、外部に売り出す大きな柱の一つであります。

今日は皆さま方からご忌憚のないご意見ご助言をいただきながら、この先の観光振興を図っていくための参考とさせていただきたいと考えております。

今日はどうぞよろしくお願いいたします。

9 議事

(1) 一関市観光振興計画の推進について

資料に基づき事務局から説明を行った。以下、質疑応答等。

委員 二次交通について、猯鼻溪に電車を利用して来られる方が多いという印象があるが、その後は、電車を利用して帰られるのか、このような二次交通のバスを利用して平泉に向かうのか、実際はどのような状況なのか。

委員 現状からすると、午前中の8時、9時、10時はJRの利用が多い。猯鼻溪の定期舟は、9時、10時、11時であるが、いつもだいたい50人くらい乗ってくる。二次交通の一番の課題は、バスも列車も市民の皆さんの足であるが、観光用の昼間の本数が限られており待ち時間が生じている。時間が合えば、バスや列車を利用して帰っている状況である。

委員 平泉と猯鼻溪の二次交通はあるが、平泉と巖美溪の二次交通はない状況である。観光協会への問い合わせの中で一番多い。これも一つの課題である。

委員 列車の接続について、新幹線と在来線の観点からも東京からお越し

のお客様が一ノ関駅で降りられて大船渡線の接続はスムーズにいくが、大船渡線で狛鼻溪や気仙沼からの下りの接続が悪い状況もある。

往路は列車で行かれても、帰りはそれぞれ皆さまのご都合で様々な手段で移動されている。

大人の休日倶楽部パスをお持ちの方は、列車を利用されているのではないかと推察する。

委員 観光案内所で狛鼻溪に行かれる方に時刻表で案内し、帰りはどうするか聞き、平泉を案内するが、平泉に向かうことが難しい時もある。また、平泉から巖美溪に向かうバスが無いことも説明している。

委員 デマンドタクシーやライドシェアのような話も今後東北ではやっていかなければならないのではないかと、というような話も出ている。

狛鼻溪から平泉、平泉から巖美溪というような移動がバスでは無理だという話になれば、検討していくことも必要ではないか。

一般の市民の方も利用できるような話かもしれないので、観光サイドから交通会議などの場で話題提供しても良いのではないかと考える。

委員 平泉と狛鼻溪の二次交通は、今年から火曜日と水曜日は運休となっている。

シーズンによってお客様の利用が違う。今であれば、みちのくあじさい園の人気があり、定期バスが狛鼻溪駅から出るが1台では乗り切れない状況となっている。

委員 花泉や館ヶ森に行くルートでの移動が困難である。二次交通の課題の中に入れていただきたい。

委員 一ノ関駅前のイルミネーションは、冬の風物詩となっている。室根地域の津谷川でも同様に開催しているので、大東地域などとあわせて冬の風物詩として観光ルートを検討していきたい。

委員 夏まつりの開催において、具体的にどのような熱中症対策を講じていこうとしているのか。

委員 開催時間を変更して、これまで午後1時に開催していたものを夕方5時から開催するとか、各団体に熱中症対策を呼び掛け給水を確保し、すぐに水分補給できるようにしていただいている。また、神輿の場合、運行距離を短くするなど工夫している。本部に救護班を配置するほか、隣接する施設に冷房の効いた部屋を確保している。

委員 事業所においては、熱中症対策改正省令が令和7年6月から施行されている。暑さ指数（WBGT値）を活用し熱中症予防対策を講じることになる。

委員 イベントにおいても、熱中症対策に配慮して開催しなければならない。

事務局 公共施設においては、涼みどころを開設しているので、そのような場所も考えていかなければならない。

委員 地ビールフェスティバルは伸びしろがある。一関の食を発信するのに良いチャンスである。バス1台分を予約制にして2時間くらいで交代するなど回転させる方法も良いのではないかと考える。

委員 全国もちフェスティバルは、今年は3万個のもちを用意し、日本一のもちまきとしてやっていきたい。

委員 もちまきは、同じ人のところにいたり、遠くまで届かなかったりして拾えない人がいるように感じる。

委員 今年はもちまきのステージを工夫する。

委員 伊達な広域観光推進協議会について、最初の頃は民間の人たちも仙台市に伺い様々なコースを造成したり協議したりしたが、新型コロナウイルス感染症の影響で縮小され、今は教育旅行の誘致事業をやっている。以前は松島から気仙沼、一関、平泉のコースをみんなの意見を取り入れ造成していた。事務局である仙台市の職員は一関のもち食に詳しく、民間も本気になって取り組んでいこうとしていたところだったが新型コロナウイルス感染症の影響で縮小してしまった。今後はどのような方向なのか。

事務局 この協議会は、コロナ禍の後は教育旅行を中心に進めてきている。コロナ禍にあっては、教育旅行は地方に多く来ていただいた。コロナ禍が収束した後は、関東、関西方面にコロナ禍前のように旅行先が戻ってきている。

インバウンドについては、ゴールデンルートで関東から九州までの地域がとても多い状況である。昨年12月に学校の先生方を一関に迎えてモニターツアーを開催していただいた。その時に先生方から関東や関西はインバウンドが多すぎて、当初計画していた教育旅行が実施できないという問題があり、東北地方にコースを変更する事例もあった。教育旅行も様々な事情からこちらの方に誘客できるのではないかと

と思っている。

また、一般の旅行の方向けの取組として今年も事業を計画する予定になっている。首都圏から仙台圏の9市町をめぐる2泊3日のツアーを現在事務局で検討している状況である。

委員 だいとう道の駅がオープンし、一関市には4つの道の駅と千厩にはまちの駅がある。今は車社会になっているので、地域着地型については道の駅の案内を充実していく必要があるのではないかと考えている。やるべきことは、観光案内のブースを設置し環境を整えて着地型の情報発信をするということも必要ではないかと考えている。

委員 受入態勢の整備に関して、ここは重要ではないかと考えている。プロモーションは大事であるが、地域の中の受入れをしっかりとやっていくことを整備していかないと来た方が満足して帰らない。それが、リピーターや口コミの部分で大事である。全体的にみると、受入態勢の整備に対する割合が少なすぎると感じる。

特に観光施設、公共施設等の受入環境の整備の部分に関しては、該当するものが無いように思える。狛鼻溪や巖美溪の公園部分の整備などが大事ではないか。

案内業務に関しては、AIなどの技術を活用することも検討していきたい。

委員 観光客おもてなし向上セミナーでみちのく潮風トレイルの話聞き、沿岸の話ではないと思った。実際に沿岸地域を歩くが、その入り口や出口は一関であり、歓迎の看板があっても良いのではないか。

委員 連携事業に関して、スケールメリットを活かしたものは当然必要だと思うが、平泉を中心としたものが何か一つあった方が良いのではないか。各連携事業で台湾のターゲットが重なることがある。調整できる体制を考えていきたい。

事務局 台湾で開催している日本東北遊楽日については、平泉町と経費的なところも調整しながら実施している。効率的により効果を高められるようにしていきたい。

委員 平泉から巖美溪のルートはバスが通っていないため、タクシーを利用し達谷窟に行くお客様が非常に多い。二次交通がうまく整備されていないと、せっかくの観光地が見逃されてしまう。

委員 大船渡線開業100周年事業については、JR、観光協会、行政などお

互いに実施する事業が重ならないように調整させていただいた。今年
は摺沢駅までの開業が100周年であり、この先も全線開業まで連携し
て実施していきたい。連携することで、点のイベントではなく、面の
イベントというところが皆さんの目に留まる場所である。

委員 岩手県も一関市も台湾をターゲットとしているが、これがいつまで
も続くとは限らないので、次はどこをターゲットとするのか、国
の動向、東北の動向、岩手県の動向と相まっていけるように情報発信
しながら取り組んでいきたい。

委員 日本人の観光客が減っている実感がある。東北観光推進機構のデー
タを見るとコロナ禍前と比較し宿泊に関しては93%くらいである。そ
の分、インバウンドが増えているので、トータルで水準を保っている
状況である。日本の宿泊業は、もともとマイクロツーリズムで支えら
れていた部分はあると思うが、東北の方々は先行して物価が上がり賃
金が上がっていないということで余裕がなくなっており、なかなか宿
泊に結び付いていかない。

そう考えると、今後台湾の方やインバウンドに注力することは大切
なことだと思う。また、レポートしてもらえるように、いかに受入環
境を整えるかというところに力点を置いてやっていった方が良いと
感じる。

観光地は投資して観光客を呼び込んで回収するモデルだと思うの
で、一度投資して観光客に来てもらえるような環境をつくることが大
事である。その辺に軸足を置いてやればよいと思う。

委員 観光の環境は大きく変わった。それにどれだけ対応しているかであ
る。

10 その他

観光地域づくり法人の登録制度に関するガイドラインの改正について情報
共有を図った。

11 担当課 商工労働部観光物産課